

# 続・僕の図書館戦争(β版)

中 相作

実録  
漫才  
あほまん列伝

芭蕉さんはまた行く

「一年間のご無沙汰でございまして」

「早いもんですね実際」

「去年の秋に出た本誌第二十三号のつづきゆうことになるんですけど」

「わざわざつづきやる必要もないのとちがいますか」

「君それなにをゆうてるんですか」

「どないしました」

「僕らの漫才ほど伊賀地域において必要とされてるものはほかにないんですから」

「どのへんが必要とされてますねん」

「必要のないものに対してそんなものは必要ないんだと指摘してやる漫才として必要とされてるんです」

「今年の漫才もなんやまたややこしそうですな」

「去年の漫才でも指摘してやったんですけど」

「なんの話題でした」

「伊賀の蔵びらき」

「君まだその話つづける気ですか」

「芭蕉さんは行かずにたくさんのあほさんが行った官民合同事業の『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』にかんして指摘をいたしました」

「たしかにあれこれゆうてました」

「二〇〇四年の事業でしたけど」

「ちようど十年前になります」

「あの事業をめぐって『伊賀百筆』第二十三号に僕が残した名言を君おぼえてませんか」

「そうゆうのはとくになかったと思いますけど」

「伊賀地域住民の魂を震撼させた名言です」

「どんなでした」

「虎は死して皮を残し伊賀の蔵びらきは大失敗に終わってあほを残す」

「そのどかが名言ですねん」

「あの名言は地域社会の真実を無慈悲なまでにえぐり出していたんです」

「いったいどんな真実ですねん」

「伊賀市といえますか旧上野市といえますか要するにあそこらあたり」

「なんぞ問題でもあるんですか」

「十年に一度のことですけど」

「大雪でも降りますか」

「西暦の下一桁が四になる年にかぎってわいて出るらしいんです」

「なにかわいて出ますねん」

「ゆうたら害虫みたいなものでしょうね」

「害虫で君」

「鳴き声もわかってますから」

「なんちゆうて鳴きますねん」

「バシヨースンガーバシヨースンガーバシヨースンガーバシヨースンガー」

「君もかしたら『芭蕉さんが』ゆうのんくり返してるだけなんとちがいますか」

「バシヨースンガーバシヨースンガーゆうて鳴きながら十年に一度わいて出る害虫がいるらしいんです」

「そんな話は聞いたことありませんけど」

「伊賀市には芭蕉が生まれた年を起点として十年単位で記念事業を実施する風習が残ってるみたいでして」

「たしかに十年前には『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』がありましたね」

「あの血税三億円をどぶに捨てて目もあてられない大失敗に終わった伊賀の蔵びらき事業の関係者は税金つかうだけついたらさっさと逃げてしまいましたけど」

「逃げてしもたゆうたら人間きが悪いですがな」

「けつまくつてとんずらかましてしまいましたけど」

「表現としてはより悪い方向に進んでませんか」

「逃げてしもただけで絶滅してしまっただけではないですからね」

「なんで絶滅せなあきませんねん」

「伊賀の蔵びらきの残党のみなさんは地域社会に生息して虎視眈々と次の機会をうかがっていたわけです」

「豊臣の残党みたいないいかたですけど」

「名張市においてはまちなか再生事業で暗躍して事業の大失敗に一役買ってくれましたし」

「その話はもう聞きあきました」

「乱歩蔵びらきの会という残党の一回はいまも名張市で活動してくれていますし」

「好きなように活動してもらったらよろしがな」

「ある意味勇氣ある活動ですけどね」

「乱歩蔵びらきの会のことですか」

「蔵びらきという言葉を団体名に使用するのは手前どもは『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』の残党でございますのでいくら石を投げられても文句はいりませんゆう看板を堂々と掲げて歩いてるようなもんですからたしかに勇氣はあるんです」

「君ほんましまいに叱られますから」

「ただまあ伊賀の蔵びらきのことはいまや完全に忘れられてますからその点が救いといえれば救いでして」

「べつに救われる必要はない思いますけど」

「それで伊賀の蔵びらきのがすがすっかり忘れ去られてからまた西暦の下一桁が四になる年を迎えました」

「芭蕉の生誕記念事業の年が巡ってきました」

「そうゆう年やからゆうてなにかせなあかんわけではないんですけど」

「でも記念事業をやったらあかんゆうことでもないですからね」

「そこなんですわね」

「どこですわね」

「まさにその点なんです」

「せやからどの点ですわね」

「記念事業が必要なのか必要でないのかという問題に客観的で正当な判断をくだすことが地域社会から僕らの漫才に求められてるわけなんです」

「そんなこと絶対にはないと思いますけど」

「つまり僕らには伊賀市民の負託にこたえてこの漫才をやりとげねばならないという責務があるんです」

「伊賀市民の誰ひとりとしてそんなことは望んでませんやろ」

「ただし僕は伊賀市民ではなくて名張市民ですから」

「それやったらおとなしいしてたらよろしがな」

「伊賀の蔵びらき事業の残党が十年後の今年どれだけ伊賀市にわいて出てバショサンガーバショサンガーゆうて鳴いたのかは正確には把握できません」

「そんなこと把握してなにをしますわね」

「ですから把握しないまままで漫才を進めたいと思いません」

「す」

「なんや話が無茶苦茶ですけど」

「けどしよせんなんにも考えんとバショサンガーバショサンガーゆうて喜んでるだけという点では誰も彼も同じ穴のむじなですからね」

「なんにも考えんと好きなことゆうて喜んでるのは君のほうやないですか」

芭蕉さんは行けない

「伊賀市ではじつは去年からもめてまして」

「君そうゆう話がほんまに好きですね」

「去年の九月議会で伊賀市がある提案をしたんです」

「芭蕉生誕三百七十年記念事業の提案ですか」

「さつぽろ雪まつりに芭蕉の雪像を設置して伊賀市が

芭蕉生誕地であることを広く全国にPRしたい」

「そういえば新聞でも報じられてました」

「そのための予算八百一万円を組み込んだ一般会計補正予算案が九月議会に上程されたんですけど」

「たしか市議会が待ったをかけたゆう話でしたね」

「雪まつり関連の予算は執行を凍結するという付帯決議案が賛成多数で可決されました」

「なんで凍結ゆうことになったんですか」

「そもそも雪まつりだけに凍結がつきものなんです」

「大喜利やってるんやないんですから」

「伊賀タウン情報YOUのウェブニュースによりまして『田山宏弘議員が「市民を巻き込んだ議論の中から発生したものは言い難く、費用対効果などの説明も不十分と指摘せざるを得ない」と説明。採決は定数24人のうち、議長を除く19人が賛成、4人が反対という結果だった』ゆうよなことでした」

「ほぼ八割の議員が凍結に賛成ゆうことですか」

「議論がとか説明がとかいろいろ意見はあったみたいですが伊賀市議会の本音は結局ひとつですから」

「本音でどんなんですねん」

「おんどれやあほんだら議会なめとつたらえらい目に遭わずぞらおんどれやあほんだらおんどれや」

「そんながらの悪い議会がどこにありますねん」

「そのあと十月の全員協議会で凍結を解除するかどうかが話し合われたんですけど最終的に解除しないゆうことが決まりました」

「さつぽろ雪まつりに芭蕉の雪像は設置しないと」

「そうゆう結末になってしもたわけなんですけどこれ最初からおかしな話ではあったんですね」

「どのへんがおかしかったんですか」

「芭蕉は北海道へ行きたいと思いつながらその夢を実現することができなかつたという話が前提でした」

「ほんまなんですかそれ」

「そう。まさにそうゆう話なんです」

「どうゆうことですねん」

「君程度の人間でもほんまなんですかそれと素朴な疑問を抱いてしまうほど眉唾もの話なんです」

「君程度の人間ゆうことはないやろがな」

「伊賀タウン情報YOUのウエブニュースによりますと去年の九月議会において『市は芭蕉が自らの人生を振り返った『幻住庵記』に、津軽海峡を渡って北海道に赴きたかったが、同行した弟子から病弱を理由に引き止められたことが綴られており、「翁の思いをかなえるため」と企画したという』ゆうよなことでした」

「それやったらちゃんと根拠のある話ですがな」

「けど芭蕉ゆうのは江戸時代の人ですからね」

「そんなこと誰かて知ってます」

「つまり芭蕉が生きていた時代には上野発の夜行列車もなければ青函連絡船もなかったんです」

「あるわけがないがな」

「凍えそうな鷗を見つめて泣いている女性が津軽海峡近辺にいた可能性は一概に否定できませんけど」

「いったいなんの話をしてるんですか」

「かりに北海道へ行ってみたとしても函館の女や小樽のひとが待ってくれてるわけでもなし」

「あたりまえですがな」

「摩周湖は霧に抱かれて静かに眠ってるだけ」

「さつきから歌の文句ばっかりですけど」

「襟裳の春はなにもない春です」

「そんな森進一さんの歌そのままやないですか」

「そんな時代に芭蕉が北海道へ行きたがってたゆうような話を君はすんなり信じられるんですか」

「けど『幻住庵記』に書いてあるゆうことですから」

「せやからそれがおかしい」

「なにがおかしいんですか」

「『幻住庵記』にそんなことが書いてあったという記憶が僕にはまったくなかったんです」

「忘れてしもてたんどちがいますか」

「僕もそう思て家にある新潮日本古典集成の『芭蕉文集』という本を開いて確認してみたんですけど」

「どないでした」

「北海道のことなんかまったく出てこないんです」

「それは妙ですね」

「こらおかしいなゆうので専門家にお聞きしてみることにいたしました」

「どなたにお聞きしました」

「この手の話は伊賀市の芭蕉翁記念館に電話一本入れたら懇切丁寧に教えていただけますから」

「あの上野公園のなかにある記念館ですね」

「そうすると信じられないような驚くべき事実が浮かびあがってきたんです」

「そんな君たいそうな」

『幻住庵記』は芭蕉が『おくのほそ道』の旅を終えてから書いた短い文章でして

「つまり晩年の作品ですか」

「芭蕉四十七歳のときの作品ですから死去の四年前ゆうことになりましたね」

「そしたら『おくのほそ道』の旅が終わって伊賀へ帰ってたところですか」

「いったん帰郷はしたんですけどそのあと大津の山にあつた幻住庵ゆうとこに四か月ほど滞在しましてね」

「幻住庵で書いたから『幻住庵記』ですか」

「疑いながら書いたなら疑心暗鬼ですけど」

「しようもないこといわんでよろしねん」

「記憶だけに頼って書くのが丸暗記ゆうやつでして」

「もうええゆうのに」

「それでその『幻住庵記』には一般に流布してるもの以外にバリエーションがあつたらしいんです」

「バリエーションと云いますと」

「異稿と云いますか異文と云いますか」

「なんのことですわねん」

「一般に流布してるものとは微妙にちがうところがある文章のことです」

「なんでそんなものがありますわねん」

「たとえば完成した文章とその下書きという二種類の原稿があつてその下書きが世の中に出た場合」

「下書きがバリエーションゆうことになるわけですか」

『幻住庵記』にも米沢家本と呼ばれるバリエーションがあつてそこには北海道が出てきてるんです」

「一般に流布してる『幻住庵記』には北海道のことは書かれてないけどその米沢家本の『幻住庵記』には北海道のことが書かれていると」

「芭蕉翁記念館に電話を入れてそうゆうことを懇切丁寧に教えていただきました」

「そしたらたとえバリエーションでも『幻住庵記』に芭蕉が北海道へ行きたいと思つていたと書かれてるんやつたらべつに問題はないのどちがいますか」

「ところがそう簡単なものやないんです」

「どうゆうことですわねん」

「米沢家本は小学館から出た日本古典文学全集の『松尾芭蕉集』に収録されてまして芭蕉翁記念館からはそのコピーもファクスしていただいたんですけど」

「なにか問題があつたんですか」

「そのコピーから信じられないような驚くべき事実が浮かびあがつてきたんです」

「君さっきからそればかりですがな」

「君さっきからそればかりですがな」

「君さっきからそればかりですがな」

## 芭蕉さん立ち往生

「たしかに北海道は出てくるんですけど」

『幻住庵記』の米沢家本の話ですね」

「もちろん当時のことですから北海道ではなくて蝦夷という言葉が使用されてます」

「北海道という地名はまだありませんでした」

『松尾芭蕉集』収録の米沢家本から引用いたしますと『猶なほとふ啼なくそとの浜辺より、糸いとぞが千ちしまをみやらむまでと、しきりにおもひ立たち待るを、同行どうぎやう曾良そうら何がしといふもの、多病たへいいぶかしなど袖そでをひかゆるに心たゆみて、きさがたといふ処ところより越路こちろにおもむく』

「さっぱり意味がわかりませんけど」

「芭蕉は『おくのほそ道』の旅で松島から湯殿山へ行って『語られぬ湯殿にぬらす袂たもとかな』とか詠んだあとなお善知鳥ぜんちとという鳥が鳴く外ヶ浜から蝦夷の千島が見えるところまで行きたいとしきりに思ったんですけど同行していた曾良そうらという者があなたは病気がちだから不安ですと袖を引いてとめたので心が弱よわり象潟せいがたというところから北陸へ行きましたゆうよなこととして」

「蝦夷が千島というのが出てきますけど」

「北海道のたくさんの島という意味ですね」

「芭蕉はそれが見たかったわけですか」

「津軽半島の外ヶ浜まで行きたいものだなあと」

「その外ヶ浜から北海道のたくさんの島を眺めてみたものだなあと」

「外ヶ浜はお能の世界では善知鳥という鳥が住んでることになってましてね」

「それで善知鳥が鳴く外ヶ浜ゆうわけですか」

「もちろん凍えそうな鷗うが鳴いていた可能性も一概には否定できないと思いますけど」

「歌の話はよろしねん」

「ところが『おくのほそ道』の旅に随行していた曾良という門人にストップをかけられました」

「あなたは病気がちなんですから外ヶ浜へ行くのはやめときましよう」と

「ですから象潟まで行って『象潟や雨に西施が合歡の花』とか詠んだあと日本海沿いに引き返しました」

「西の能登半島のほうへ進んだゆうことですな」

『荒海や佐渡に横たふ天の河』とか詠みながら『おくのほそ道』の旅がつづいたわけなんですけど君」

「どないしました」

「芭蕉も思わず古池に飛び込んでしまうほどの信じられないような驚くべき事実が判明したんです」

「またそれですか」

「これが驚かずにいられますか」

「いったいなにに驚いてますねん」

『幻住庵記』の米沢家本には芭蕉が北海道へ行きたくていたとはただのひとことも書かれていなかったんです」

「そうゆうたらそうですね」

「芭蕉はただ北海道のたくさんの島が見えるところまで行きたかっただけで」

「津軽半島の外ヶ浜まで行きたいと思つたとは書いてありましたけど北海道に渡りたいとは書かれてませんでした」

「なにしろ上野発の夜行列車もなければ青函連絡船もなかった時代です」

「その話はどうよろしやる」

「にもかかわらず伊賀市は芭蕉が北海道へ行きたくていたからという理由でさつぽる雪まつりに芭蕉の雪像を設置するための予算案を計上したんです」

「ちよつとおかしな話ですね」

「つまりその予算案には芭蕉も思わず旅に病んで夢が枯野をかけめぐり犬は喜び庭かけまわるほどの恐るべき陰謀が秘められていたわけなんです」

「君そんなんばっかりですがな」

「ここで念のために確認しておきますと芭蕉が北海道へ行きたくていたというのは大うそです」

「大うそゆうたら語弊がありますけど」

「つまり虚偽の情報なわけです」

「そしたら伊賀市は虚偽の情報を根拠にさつぽる雪まつり関連の予算案を組んだわけですか」

「水面下で悪辣な陰謀をめぐらしてでも芭蕉の雪像を登場させたかったゆうことでしょうね」

「けどぶつうそこまでしませんやろ」

「たしかにちよつと信じられない話ではあるんです」

「どのへんが信じられないんですか」

「まず誰も疑問を抱いていないという点ですね」

「疑問といえますと」

「芭蕉が北海道へ行きたくていたという話を聞かされた人はたいはいほんまかいなと思うはずです」

「江戸時代の話ですから」

「芭蕉は赤穂浪士が討ち入りしたころにはもう死んでしもてたぐらい昔の人ですから」

「赤穂浪士はとくに関係ないと思いますけど」

「だというのに君程度の人間でも抱いたさうゆう疑問を関係者の誰ひとりとして抱いた形跡がないんです」

「君程度の人間ゆうのはやめなさいゆうてますがな」



「少なくとも十年に一度バシヨースンガーバシヨースンガーゆうてわいて出てくるほどの伊賀市民のかたなのであればですね」

「そうゆういいかたはまずいのとちがいますか」

「当然疑問を抱いて家に帰ってから『幻住庵記』の北海道にかんする記述を確認するはずなんです」

「それはそうでしょうね」

「なにしろ十年に一度バシヨースンガーバシヨースンガーゆうてわいて出てくるほどの人なんですから」

「それはもうええねん」

「ご自宅に『幻住庵記』が収録された本の一冊や二冊はご所蔵のはずですし」

「そんなことわかりませんがな」

「かりにご所蔵でない場合でも芭蕉翁記念館に電話を入れたら疑問はすぐに氷解いたします」

「記念館には専門家がいらつしゃいますから」

「ところが実際には芭蕉が北海道へ行きたがっていたと聞かされてへえそうでんのかで終わってるんです」

「そんな感じがしないでもないですね」

「ですから十年に一度バシヨースンガーバシヨースンガーゆうてわいて出てきてるゆうてもですな」

「バシヨースンガーはもうやめませんか」

「じつはみなさん芭蕉のことをろくにご存じないのやないかという気がしてきまして」

「推測だけでものゆうたらあきませんがな」

「というよりこうなると芭蕉がどうこうゆう以前に一般的な常識の有無が問題になる気もいたしますけど」

「そこまでゆうことないのとちがいますか」

「でも『幻住庵記』の本文を確認しようとした関係者がひとりもないなかつたとしか思えないんです」

「それかてただの推測ですがな」

「ですからそのへんの事実関係がどうであったのか伊賀市議会あたりで厳しく追及していただいたほうがいいのかもしれないけどそんなことはとても無理でしょうしね」

「無理と決めつけたらあきません」

「けどこの問題を追及しようと思つたらどうしても教養と見識が必要になりますから」

「君そんなこといいますけど伊賀市議会にも教養と見識を兼ね備えた先生はいらつしゃいますやろ」

「いや伊賀市議会でそんな先生を探すゆうのは君」

「なんですなねん」

「北海道でアフリカ象を探すようなもんですがな」

「なんでアフリカ象が出てきますねん」

## 芭蕉さんいつまた帰る

「なんともおかしな話でしてね」

「たしかにかなり変です」

「表面上の事実から判断したら伊賀市が大うそをついてたことにまちがいはありません」

「大うそと表現していいかどうかはともかく『幻住庵記』には芭蕉が北海道へ行きたいと思つていたというようなことはいっさい書かれていませんでした」

「ところが伊賀市は『幻住庵記』にそう書いてあるという虚偽を申し立てて市民を瞞着したわけです」

「そこまで悪辣な陰謀をめぐらしてでもさっぼろ雪まつりに芭蕉の像を設置したかったゆうことですけど」

「それほんまなんですかね」

「ほんまもなにも君がゆうてたことですがな」

「けど『幻住庵記』の米沢家本に北海道が出てくるといふ事実を目をつけるのはふつうの人間にはとてもできないことですから」

「それなりの知識が必要ですからね」

「しかも米沢家本の記述にもとづきながら芭蕉が北海道へ行きたがつていたという虚偽の事実を捏造するよくな手の込んだ小細工まで弄してるんです」

「その虚偽の事実が予算案の根拠になってました」

「そこまでの芸当が伊賀市役所のみなさんのおつむで可能かどうかゆうことになりますと」

「君またそんなことゆうてますけど」

「たぶん死んでも不可能でしょう」

「またそうやって決めつけてますけど」

「そしたらこの一連の悪辣な陰謀はそもそも誰によつて仕組まれたのかと思ひ悩んでいたある日のこと」

「なにがありました」

「伊賀市議会の議事録から芭蕉も思はずふるさどで臍の緒に泣いてしまうほどの信じられないような驚くべき事実が浮かびあがってきたんです」

「きようはよう浮かびあがつてくる日なんですな」

「昨年九月十八日に開会された予算常任委員会においてある委員から質問が出されました」

「さっぼろ雪まつりにかんする質問ですか」

「それに対して『そもその発端は、これは市民の方からの御提案がございました』という市長答弁があつたんです」

「もともと市民の提案やつたんですか」

「でもそれならそれでまた芭蕉が思はず鳥や魚といつしよに泣いてしまうほどの信じられないような」

「驚くべき事実が浮かびあがってきたわけですね」

「事実というかある疑問が浮かんでくるわけです」

「どんな疑問ですもんね」

「裏は取らんかったんかという疑問です」

「といいますと」

「なんらかの情報が寄せられた場合その真偽を確認するのが裏を取るゆうことなんですけど」

「そしたらこの場合はなにを確認しますもんね」

「その市民からの提案にはおそらく米沢家本『幻住庵記』の情報が含まれていたはずですよ」

「提案の根拠になつてた文章ですから」

「つまり伊賀市は米沢家本に実際に目を通して提案の根拠を確認しなければならなかったんです」

「確認したら芭蕉が北海道へ行きたがつていたとは書かれていないという事実が判明しますよ」

「そうした事実を知りながらあえて大うそをついたのかそれとも米沢家本を確認する労を取ることなく市民提案を鵜呑みにして結果的に大うそをついたのか」

「それはぜひとも追及するべきことやないんですか」

「けど伊賀市議会は北海道のアフリカ象ですから」

「そんなん君が勝手にゆうてるだけのことですがな」

「ばおーッ。ばおーッ」

「なにも象の鳴き真似することないと思いますよ」

「でもまあ伊賀市議会の先生がたがおんどれやあほんだら議会なめとつたらえらい目に遭わずどころおんどれやあほんだらおんどれやと待ったをかけてくれたおかげでなんとかことなきを得たわけですから」

「そうゆうことになりますか」

「そんなもんさつぼる雪まつりに芭蕉の像が登場してその前で伊賀市の人間が芭蕉さんの夢は北海道へ来ることでございましたとか説明したりしたら君」

「伊賀市はちよつと恥ずかしいことになつてたかもしれませんね」

「話そのものはかなり面白かつたんですけど」

「さつぼる雪まつりに参加することですか」

「たとえば十年前の伊賀の蔵びらきではですね」

「またその話ですか」

「本誌第二十三号の漫才でも指摘したとおりちまちましたご町内イベントを寄せ集めて関係者がひとりよがりには舞いあがつただけやつたんですけど今回の話はそうゆうのとは明らかに一線を画してますからね」

「北海道で開催される著名なイベントに参加するゆうだけでも過去に例のない話ですよ」

「つまり『幻住庵記』は必要になつたんですよ」

「どうゆうことですかねん」

「生誕三百七十年芭蕉さんが行くさつぽろ雪まつり。ただそれだけのことでよかったです」

「その場合なにが根拠になるんですか」

「さつぽろ雪まつりに参加することは伊賀市のPRになりやすいうだけで事業の立派な根拠ですがな」

「費用対効果の問題は」

「実際にやってみないことには具体的な効果なんか誰にもわかりません」

「そしたら『幻住庵記』がどうのこうのと理由づけする必要はなかったわけですか」

「そんな小細工はまったく必要ありませんでした」

「いわれてみたらそんな気もしてきましたけど」

「芭蕉さんと北海道はなんの関係もありませんけどええPRになると判断いたしましたので伊賀市の大切な税金をつかって芭蕉さんに雪まつり行ってもらいまーすゆうて市議会や一般市民に説明を尽くしたらそれです全然OKやったと思いますね」

「けどそれではまるで芭蕉を伊賀市のPRに利用してみたいいな感じですけど」

「芭蕉というビッグネームを伊賀市のPRに利用するというのは恥ずべきことでもなんでもありません」

「そんなもんですか」

「ろくに芭蕉のことも知らんくせに十年に一度バシヨ一サンガーバシヨ一サンガーゆうてわいて出てくる害虫のみなさんは横に置いてすね」

「害虫のみなさんとかゆうたらあかんがな」

「ちゃんとした知識と見識にもとづいてしっかり考えた企画によるPRをばんばん展開したらええんです」

「ご町内イベントではどうしようもありませんか」

「ですからさつぽろ雪まつりに参加できなかったのはちよつと残念なことでしたね」

「参加してたらどうなりました」

「それは参加してみないとわかりませんがそこそこ図にあたってた可能性もゼロではないですから」

「図にあたってたらその先はどんな展開ですか」

「芭蕉が全国各地の各種イベント会場をたどりながら伊賀市をPRすることになってたかもしれませぬ」

「芭蕉さんがさつぽろ雪まつりをスタート地点にして現代版『おくのほそ道』の旅に出るわけですか」

「そうなったら伊賀には帰ってくれないでしょうね」

「なんで芭蕉さん帰ってくれませぬん」

「そもそもスタートが雪まつりだけにゆきはあつても帰りはありません」

「大喜利やってるんやないてゆうてますがな」

## 乱歩生誕六十年七十年八十年

「いつぼうこちら名張市の話題でございますけど」

「なかなか忙しい漫才です」

「じつは江戸川乱歩が生まれたのも西暦の下一桁が四になる年でして」

「偶然にも芭蕉といっしょですか」

「つまり今年は乱歩生誕百二十年の年なんです」

「いわゆる大還暦ですね」

「しかも名張市が市制施行六十周年」

「人間でゆうたら還暦を迎えました」

「町村合併によって人口三万人の名張市が誕生したのは一九五四年のことです」

「これまた偶然にも西暦の下一桁が四になります」

「ですから乱歩が六十歳の還暦を迎えた年に名張市が発足したということになるわけです」

「偶然とはいえ今年はかなり意義深い年です」

「おめでたいことがいろいろ重なってる年にこんな漫才やっててええのかという気もいたしますけど」

「ほなやめたらどないですか」

「でも僕らの漫才には名張市民の負託にこたえる責務があるんですからやめるにやめられません」

「誰ひとり負託なんかしてくれてませんやろ」

「それで六十年前の話ですけどそのころの名張市には乱歩がどうこうゆうてる余裕はありませんでした」

「生誕地碑が建立されたはずですけど」

「たしかに名張市発足の翌年に生誕地碑が除幕されたんですけどあれはあくまでも市民レベルの話です」

「行政とは関係なしに一般市民がお金を出し合って乱歩の生誕地碑をつくりましたと」

「町村合併で旧町村が赤字を持ち寄りましたから名張市の財政は無茶苦茶なことになってたんです」

「名張市の歴史は赤字で始まったんですか」

「発足二年後の五六年にはとうとう財政再建団体に転落してしまいました」

「ほんまに乱歩どころではなかったんですね」

「そのうえ五九年に君またえらいことが」

「なにがありません」

「伊勢湾台風の直撃で大変な被害を受けました」

「泣きつ面に蜂ですがな」

「それでも六一年には財政再建が終了いたしました」

「先人のみなさんががんばってくれました」

「そのあとまた西暦の下一桁が四になる年が巡ってきたわけです」

「市制十周年の一九六四年ですね」

「一九六四年の名張市では大きな動きがありました」

「ちょうど半世紀前ゆうことになりますけど」

「一般的には東京オリンピックが開催されたことで記憶されてる年です」

「なるほどそういう年でしたか」

「東京オリンピックには日本の復興を国際的にアピールするプロジェクトという一面もありまして」

「敗戦による痛手から立派に立ち直りましたと」

「開会式直前には東海道新幹線も開通しましたしね」

「日本の技術力の高さが世界に発信されました」

「ですからオリンピックの参加選手も必死でした」

「国の威信を背負ってましたから」

「いまでこそスポーツの指導で体罰はいけなとかいろいろいわれるようになりましたけど」

「当時はなにがなんでも金メダルゆうことで信じられないほど厳しい指導もあったみたいですね」

「とくに有名だったのが女子バレーボール」

「監督は鬼と呼ばれた大松博文さんでした」

「鬼のようになさけ容赦のない指導がつづきました」

「でも女子選手はみんなそれに耐えたんですね」

「ですから東洋のマゾとかいわれてまして」

「それは東洋の魔女ですね」

「日本が東京オリンピックを成功させたことで経済大国になると宣言した年にここ名張市におきましたは」

「どんな動きがあったんですね」

「近鉄大阪線の桔梗が丘駅が開業いたしました」

「それほど大きな動きでもないと思いますけど」

「これから大阪のベッドタウンになりますと名張市が高らかに宣言したわけですから」

「そういう意味では大きいかもわかりません」

「発足当初の名張市は田園観光都市というのをキャッチフレーズにしてみましたね」

「そんなんあったんですね」

「田んぼや畑があるから田園で」

「赤目滝と香落溪があるから観光ですか」

「そのままやないかゆう話なんですけど」

「でもとくになんにもない土地ですから」

「なんにもないとこですから一九五四年に市になったあとも人口がじわじわ減りつづけてまして」

「赤字やわ人口は減るわではさっぱりわやですがな」

「そんななんにもない土地にもじつはあったんですね」

「なにがありましたん」

「なんにもない土地があったんですね」

「君いったいなにをゆうてますねん」

「つまり名張市には大型住宅地として造成できるなんにもない土地がたくさんあったわけなんです」

「大阪のベッドタウンになる可能性が眠っていたと」

「大きなポイントは近鉄大阪線でした」

「近鉄一本で大阪まで一時間で行けますから」

「ですからまず近鉄が桔梗が丘住宅地の開発に着手して桔梗が丘駅を開設いたしました」

「そのあと新しい住宅地がどんどん生まれました」

「名張市は完全に大阪の通勤圏に入りましてね」

「新しい市民も増えてきました」

「はつきりゆうたら名張市はなんにも考えてなかったんです」

「といますと」

「田園です観光ですゆうてるあいだに大手デベロッパが勝手に目をつけてくれたわけですから」

「名張市のなんにもない土地に住宅地としての価値があることを発見してくれました」

「ですから名張市はなんにも考える必要がなくてただもうどーなと好きにしてだーこと」

「もうどうにでも好きにしてくださいと」

「ぼーっとしたまま半世紀」

「ぼーっとしたままではあきませんかな」

「けどほんとにぼーっとしてるだけで新しいまちができて人口が増えていったんです」

「それなりに必要な施策や事業はあったのところがいまずか」

「もちろん新しい住宅地が誕生したら学校とか公民館とかいろいろつくらなあきません」

「いわゆるインフラの整備ですね」

「ハード面以外に新旧市民の関係を良好なものにせなあかんという課題も浮上してきました」

「大阪方面から新しい住宅地に引っ越してきた市民と以前から住んでる市民がいかにして親しくなるかと」

「ですから乱歩生誕八十年の一九七四年」

「なにかありました」

「新旧市民の融和を合言葉にした名張夏祭りが初めて開催されました」

「市民総踊りゆうやつですか」

「せやてせやてほんまやてとか思わず赤面してしまうような囃子が夏の夜空にやかましくこだましまして」

「新旧市民がひとつになったわけですがな」

「そんなようなことでしたから生誕八十年ゆうても誰ひとりとして乱歩のことは思い出しませんでした」

「乱歩はぼったらかしでしたか」

## 乱歩生誕九十年

「名張市の快進撃はさらにつぎきました」

「たしかに急成長しましたね」

「人口も一九七九年には四万人を超え八三年には五万人を突破し」

「それでまた西暦の下一桁が四になる一九八四年が市制三十周年で乱歩生誕九十年の年でしたけど」

「名張市は乱歩のことなんかどこ吹く風で一九八七年には六万人を超え九〇年には七万人を突破し」

「どこまで行きますねん」

「名張市制四十周年にして乱歩生誕百年にあたる一九九四年にはついに人口八万人台に突入いたしました」

「八万人台はええんですけど乱歩生誕百年でなにか記念事業はあったんですか」

「このときは全国的な乱歩ブームが起きてましてね」

「そうなんですか」

「たとえば出版界では乱歩を特集した雑誌があいついで発行されました」

「どんな雑誌ですか」

「『話の特集』『ガロ』『シナリオ』『キネマ旬報』『創元推理』『太陽』『幻想文学』『国文学解釈と鑑賞』

「一年のあいだに八つの雑誌で乱歩特集ですか」

「乱歩生誕百年と松竹創業百周年を記念した『RAM PO』という映画も黛りんたろう監督バージョンと奥山和由監督バージョンの二作品が公開されました」

「本木雅弘さんが明智小五郎を演じた映画ですね」

「もちろん乱歩関連の本もたくさん刊行されました」

「なにしろブームですから」

「本のタイトルだけ列挙しますと『乱歩』『ふたりの乱歩』『江戸川乱歩アルバム』『江戸川乱歩の大推理』『江戸川乱歩99の謎』『回想の江戸川乱歩』『少年探偵団読本』などなど」

「一年でそれだけ出たんですか」

「ほかに乱歩作品の文庫本も八冊ほど出版されてとにかく大変な乱歩ブームやったんです」

「そしたらやっぱり名張市でも」

「さすがに記念事業がいろいろありました」

「当然そうなるでしょうね」

「名張市がちょうどそうゆう時期に来てたゆうこともありましたから」

「そうゆう時期でどうゆう時期ですもん」

「快進撃がつづいたからこらでそろそろかっこつきたいなみたいな」

「なんでかっこつけないあきませんねん」



「人口増で成長したあとはやっぱり地方都市としてのグレードアップゆうことに目が行きますから」

「三万人都市が八万人都市になってそれなりのグレードを求めるようになったわけですか」

「昔のままの田園と観光に大規模住宅地をつけ加えただけの田舎まちではかつこがつかんやないかと」

「グレードの高さを広く知らしめたいと」

「経済的に余裕ができたらどうしてもそっちのほうに走ってしまいがちです」

「余裕がないときは大衆食堂ばっかりやけど余裕ができたら食事もグレードアップして高級レストランへ行くようになるみたいなことですか」

「ずーっと吉野家名張店やったけどそろそろグレードあげてスシロー名張店へ行こやないかとか」

「それではグレードに変化がないと思いますけど」

「さようなら和食さと上野白鳳店」

「グレードあげてどこ行きますねん」

「こんにちは和食さと伊賀上野店」

「それおんなじチェーン店の系列ですから」

「そうかと思うときようは元祖伊賀肉金谷の前をばあーっと素通りしたるやないかとかですな」

「君のグレードいっこもアップしてませんがな」

「グレードをアップするうえで手っ取り早いのは高級ブランドを所有することなんですけど」

「いわゆるステータスシンボルですか」

「名張市もそうゆうのが欲しい時期を迎えました」

「誰にもわかる高級ブランドを身につけて」

「グレードの高い地方自治体になりたいなど」

「それで名張市はどうしました」

「地元ゆかりの高級ブランドを必死に探しました」

「なんぞええのがありましたか」

「なんとふたつもあったんです」

「いったいなにがありましたん」

「観阿弥と乱歩です」

「たしかにどちらも名張市に関係があつて全国的に通用する名前です」

「名張市はこのふたつのコンテンツをグレードアップに役立てようとしたんですけど」

「なにか問題でもありましたか」

「そんな芸当が名張市役所のみなさんのおつむで可能かどうかゆうことになりますと」

「君またそんなことゆうてますけど」

「なんべん死んでも不可能でしょう」

「べつに死ぬ必要はありませんがな」

「手前どもはなにも考えさせていただかないことになさせていたいております」

「そのせりふ去年の漫才にも出てきてましたね」

「手前どもはできるだけ働かせていただかないようにさせていたいております」

「それがお役所の決まりゆうことでしたけど」

「せやから無理はいわんといたってほしいんです」

「なにが無理ですもん」

「観阿弥と乱歩で名張市をグレードアップせよとかそんなこといわれてもとても無理なんです」

「けどいろいろやってたんとちがいますか」

「観阿弥関連では一九九一年に名張薪能が始まりました」

「観阿弥ゆかりの地にふさわしいイベントですがな」

「ただし名張市はみるうちに財政難で二〇〇七年からは予算が安い屋内開催となっております」

「名張薪能ではなくなって名張夏能ゆうことで」

「乱歩関連では同じく九一年にミステリー講演会が始まりました日本推理作家協会から派遣していただいた作家先生の講演が毎年の恒例になりました」

「いまをときめく人気作家の先生がたに名張市までおいでいただきました」

「要するにこうした場合のグレードアップはたいいてい成金趣味に陥ってしまうわけなんですな」

「成金趣味ゆうことはありませんがな」

「とりあえずお金を出してそこらでやってることの真似しといったらOKやないかと」

「そういえば薪能では名張市より先に旧上野市が上野城薪能を始めてましたし講演会なんかそれこそどこでもやってることですすけど」

「なにも考えずできるだけ働かないみなさんが自治体のグレードアップを図るとなると自分の腹の痛まない税金で成金趣味に突っ走るしかないんです」

「成金趣味で高級ブランドを買うわけですか」

「当時の名張市はお金だけはあったみたいでして」

「でもそうやって観阿弥と乱歩による名張市のグレードアップが始まったわけですから」

「その三年後が一九九四年でした」

「乱歩生誕百年の年になりました」

「その記念事業ゆうのが君えらいもんで」

「どないしました」

「名張市が実施した乱歩生誕百年記念事業のことをいまや名張市民の誰ひとりとしておぼえてないんです」  
「そんなあほな」

## 乱歩生誕百年

「乱歩生誕百年の年に名張市がいったいどんな記念事業を展開したのか」

「誰もおぼえてないゆう話ですけど」

「たとえ名張市民は忘れていてもちゃんと記憶にとどめてくださってる乱歩ファンもありませんか」

「そんな奇特なかがいらっしやるんですか」

「去年の二月のことでしたけど」

「どないしました」

「その乱歩ファンのかたが僕のブログのコメント欄に書き込みをしてくれたんです」

「どんなご用件でした」

「名張市の乱歩生誕百二十年記念事業に期待していません」

「名張市にエールを送っていただいたんですか」

「そのかたは乱歩生誕百年記念事業のひとつにも遠路はるばる参加してくださったそうでした」

「それで生誕百年記念事業のこともちゃんとおぼえてくれてたわけですか」

「名張市の二十年前の記念事業がどんなんやっただかゆうこともコメントとして書き込んでくださいました」

「ほんまに奇特なかたですな」

「四件の記念事業についてお書きいただいてありましていまでも僕のブログで読めるようになってるんですけどここで紹介してみたいと思います」

「記憶に残った記念事業ベスト4ゆうわけですね」

「まず最初は『①ミステリートーク「江戸川乱歩の人物像」↓山村正夫氏の講演』」

「九一年に始まったミステリー講演会の流れですか」

「九四年は第四回目となりまして日本推理作家協会から山村正夫先生がおいでくださいました」

「乱歩の人物像についてどうおっしゃってました」

「いやじつは僕その日はちよっとした事情があつて山村先生の講演を拝聴できなかったんです」

「それではあきませんがな」

「つづきましては『②乱歩賞作家・石井敏弘氏の書き下ろし小説「北斗七星の迷宮」を出題とするミステリーウォーク。参加者約800人で、犯人と殺人動機の正解者には、漏れなく名探偵認定証をくれました。また、正解者のなかから抽選で、名張のお土産セットが贈られ、日本最北（と言っても福島ですが）から参加した私もいただきました。小説の解答編を演劇で上演したのも画期的でした』」

「参加者八百人ゆうのはすごいですね」

「僕そのミステリーウォークに行きませんでしたから  
すごかったかどうかはよくわからないんです」

「なかなか面白そうな企画やと思いますけど」

「乱歩賞作家の石井敏弘さんは全国各地でこうゆうこ  
とを手がけていらっしやいました」

「名張市の企画ではなかったんですか」

「たとえば平城京遷都千三百年の二〇一〇年には石井  
さん奈良でおんなじようなことやってはりました」

「名張市は石井さんの企画をかうただけなんですか」

「ですから名張市には成金趣味でありものをかう程度  
のことしかできないゆうてますがな」

「ほかの記念事業もそうなんですか」

「みつつめは『③白石加代子氏の「百物語」シリーズ  
の一環として、「押絵と旅する男」「人間椅子」が上演  
されました』ゆうことでして」

「それもやっぱりあります」

「東京の岩波ホールで初演したあと全国で上演されて  
いるのが白石加代子さんの『百物語』シリーズです」

「それを名張市がかうてきたゆうことですか」

「しかもこれはたぶん名張市の直接買いつけではな  
かったと思うんですけど」

「そんな君デパートのバイヤーやないんですから」

「たしか旧上野市民のかたから持ち込まれた企画やっ  
たような記憶があります」

「旧上野市民のかたといいますと」

「白石さんの事務所かなにかの関係者のかたとその旧  
上野市民のかたがお友だちかなにかやったかと」

「なにかばっかりですがな」

「なにしろもう二十年も前の話ですから」

「とにかく白石さんのシリーズから乱歩作品を選んで  
記念事業として上演してもらったわけですね」

「そうゆうことしかできないみたいでして」

「独自企画はなかったんですか」

「いただいたコメントのラストが『④名張市立図書館  
の「大乱歩展」が開催されました。↓「貼雑年譜」の  
実物を初めて、観ました。中さん演出の「盲獣」の演  
劇は、観れなかったのは、残念でしたが』となってお  
ります」

「名張市立図書館の大乱歩展はさすがにオリジナルの  
企画やったんでしょうね」

「じつは僕その大乱歩展に行ってませんので」

「君そんなんばっかりなんです」

「昔から出不精でございます」

「そうゆう問題やないと思いますけど」

「あんまり気が進まなかったんでしょうね」

「けど君お芝居を演出したそうですけど」

「その件はコメントを寄せてくださったかたの誤解なんです」

「そしたら君はなにをしたんですか」

「ちよっとした講演をしたんですけどしゃべってばかりゆうのも疲れるやらなど考えまして」

「講演するだけではそれほど疲れませんやら」

「座・名張少女という劇団をやった女の子数人に頼んで『盲獣』とか『人でなしの恋』とか講演の途中で乱歩作品を朗読してもらいました」

「完全な手抜きですがな」

「ギャラはもちろん僕がひとり占めしましたけど」

「よけいあきませんがな」

「それでその日の午前中が僕の講演で午後になってから山村正夫先生の講演会が催されたんですね」

「山村先生の講演会は事情があって行けなかったゆうて君さつきゆうてましたけど」

「もちろん拝聴するつもりではいたんですけど」

「どんな事情がありましたん」

「日が悪かったんですね」

「どうゆうことですか」

「その年のプロ野球セリーグは巨人対中日の最終戦で勝ったほうが優勝という劇的な展開になりました」

「いきなり話題が変わってるんですけど」

「巨人の長嶋茂雄監督がいみじくも国民的行事と呼んだ最終決戦を制したのは巨人のほうでした」

「知りませんがなそんなこと」

「つづく日本シリーズは巨人と西武の一騎打ち」

「それがどうしたんですか」

「当時は西武の黄金時代で日本シリーズの巨人戦でも負け知らず。九〇年なんか四戦四勝の圧勝でした」

「いわゆる四タテですか」

「ですから九四年の日本シリーズは巨人にとって雪辱を期した戦いになったんです」

「山村先生の講演会はどないしました」

「その巨人対西武の日本シリーズ第一戦がちょうど山村先生の講演会の日にあつかりまして」

「講演会は昼間のうちに終わってしまいますがな」

「あいにくと当時の日本シリーズはデーゲーム」

「そしたら君」

「うちに帰って第一戦をテレビ観戦してるあいだに山村先生の講演が始まって終わってしまったんです」

「君いったいなにをしとったんですか」

## 乱歩生誕百十年百二十年

「そんなこんなであほなことばかりゆうてるあいだにまたしても十年が経過しました」

「乱歩生誕百十年の二〇〇四年を迎えましたか」

「いまやすっかり忘れられてますけど二〇〇四年には芭蕉さんは行かずにたくさんのあほさんが行った官民合同事業『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』が開催されました」

「その話題はもうええのとちがいますか」

「あの事業にはじつは乱歩関連イベントもいくつか組み込まれていたんです」

「どんなイベントでした」

「演劇とか展示会とかそうゆうのでしたけど」

「そしたらそれが実質的に乱歩生誕百十年の記念事業やったゆうことですか」

「そのはずなんですけどあの伊賀の蔵びらき事業はろくに芭蕉のことも知らんくせに十年に一度バショースンガーバショースンガーゆうて鳴きながらわいて出る害虫のみなさんでおなじみの芭蕉生誕三百六十年がメインでしたから乱歩生誕百十年のことはほとんど話題になりませんでしたね」

「害虫とかそうゆうことゆうの君ほんまにあかんで」

「そんなんいちいち気にする必要はありません」

「関係者から叱られたらだないしますねん」

「バルサンたいたつたら静かになります」

「せやから人を虫あつかいするなゆうてますねん」

「虫あつかいに関連してお知らせしておきますとそもそも虫ゆうのは冬のあいだは姿を見せません」

「土のなかとかで冬を過ごしますから」

「越冬した虫が地上に出てくることすなわち蟄虫が戸を啓くことを略して啓蟄と申します」

「毎年テレビの天気予報で紹介されますけど」

「暦のうえの二十四節気のひとつですから」

「気候が暖かくなってそろそろ虫も顔を出してくるころのことですね」

「だいたい三月六日前後が啓蟄で」

「立春から一か月ほどたったころです」

「話の流れとしては今年が乱歩生誕百二十年の年であるということではあるんですけど」

「さつきから話題がころころ変わってませんか」

「つまり話の流れがストリップしてるわけなんです」

「どうゆうことですねん」

「なにしろ啓蟄もまだなんですから」

「君いったいなんの話をしてるんですか」

「去年の秋に出た『伊賀百筆』第二十三号では思わぬ不覚を取ってしまいました」

「不覚だらけでなかが不覚かようわかりませんけど」  
「のんびり構えてるあいだに第二十三号の締切が来てしまっただんです」

「せやからそのつづきをいまやってるわけですがな」  
「今年はそうゆう失態をくり返してはならないと」

「当然そうあるべきでしょうね」

「年明けとともに第二十四号用の漫才を始めました」

「なかなか殊勝な心がけです」

「それできょうはまだ二月九日の日曜日なんです」

「それがどうしました」

「立春は過ぎたものの春は名のみの風の寒さよ」

「まだまだ春は遠い感じです」

「名張のまちではきのうがえべっさんでしてね」

「鍛冶町にある蛭子神社の八日えびすでした」

「残念なことに雪にたたられました」

「朝から雪が積もってたうえにみぞれが降って寒い一日になりました」

「人出も少なくてもう名張のまちはえべっさんにも見放されてしもたでともっぱらの評判です」

「たまたま天気が悪かっただけですな」

「つまりまだ二月上旬ですから乱歩生誕百二十年記念事業の話題がなにひとつないんです」

「お役所の年度ではまだ二〇一三年度ですし」

「いっぽうで一年も前から乱歩生誕百二十年記念事業に期待してくれてるかたもあるんですけど」

「乱歩ファンのかたからエールをいただいています」

「実際にはいまのところ記念事業なんか影もかたちもない状態です」

「どないしますねん」

「かといってこのままずる記念事業を待つてたらまた締切に間に合わなくなる可能性が出てきます」

「それはなんとか避けたいですね」

「ですから窮余の一策」

「また妙な手に出るわけですか」

「これから乱歩生誕百二十年でがんばってくれそうな名張市民にスポーツをあてたいと思います」

「そんな市民がいらっしやるんですか」

「名張市では去年の十月に乱歩生誕百二十年を視野に入れた乱歩生誕祭ゆうのがありました」

「いわゆるプレイベントですね」

「その流れで今年もなにかあるはずなんです」

「その人たちが記念事業をやってくれるわけですか」

「昨年十月二十一日付の朝日新聞ウェブニュース『怪人二十面相も祝う』から引用しますと『名張市生まれの推理作家、江戸川乱歩（1894～1965）の誕生日前日の20日、初めての「乱歩生誕祭」が、近鉄名張駅東口で開かれ、怪人二十面相のパフォーマンスや合唱で祝った。／市民らでつくる実行委員会（小島敏孝世話人）が来年の生誕120周年を前に乱歩生誕の地を市内外にPRしようと企画した。／雨の中、黒マント、シルクハット姿で怪人二十面相に扮した会社員上田豊太さん（43） ㊦桔梗が丘4番町㊦が、オリジナル曲に乗って、駅前立つ乱歩像の前に登場。「乱歩先生は50歳を過ぎて名張の人たちと交流し、心の古里となった。名張との絆を思い、さらなる発展をお手伝いしたい」と口上を述べた』ゆうよなこととして」

「当日はあいにくの雨でしたか」  
「名張のまちはいまやいろいろなところから見放されてしまわれるともつばらの評判で」

「たまたま天気が悪かっただけやゆうてますがな」

「つづきまして今年一月一日付の毎日新聞ウェブニュース『江戸川乱歩…生誕120年 “大還暦” 祝おう（その2止） ㊦三重』となります」

「乱歩生誕百二十年の年頭を飾った記事ですか」

「記事の一部を引用いたしますと『江戸川乱歩の愛好家でつくる「乱歩蔵びらきの会」は今年で結成10年を迎える。作品の魅力を発信する同会の代表、的場敏訓さん（55） ㊦名張市百合が丘東3㊦は「地域を活性化させるには、若者をいかに元気にさせるか。若者を共感させる物を、その地域がどれだけ持っているかに懸かっている」と強調する。名張については「素晴らしい文化人を輩出し、乱歩の生まれた地に誇りを持ちたい。今秋の生誕120年は、単なる記念イベントとして、一過性で終わらせたくない」と意気込む』」

「乱歩蔵びらきの会の話題ですか」

「その会がじつは芭蕉さんは行かずにたくさんのあほさんが行った官民合同事業『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』の残党組織であるという事実はこの記事には書かれてないんですけど」

「そんなことわざわざ書く必要ありませんがな」

「とにかくまあ関係各位のみなさんには今年の記念事業をぜひとも成功に導いていただきますよう陰ながらまた心からお願いを申しあげまして」

「乱歩生誕百二十年の話題はそれでよろしいですか」

「この漫才はいよいよここからが本題です」

「いったいどこまで行きますねん」



